

様式(細則5-2)

平成23年10月14日

浜田市議会議長 牛尾博美 様

議員名 笹田 卓



## 調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

### 記

1、期間 平成23年7月31日(日)～8月3日(水)

2、視察又は訪問先 福島県相馬市、南相馬市

3、調査経費 25,477円

#### [内訳]

15,137円 旅費運費

10,340円 宿泊費

4、調査研究活動の概要

別紙のとおり



## 調査研究活動の概要

笹田 卓

2011年8月1日（月）

### ●福島県南相馬市

○相馬市から南相馬市での海岸沿いの被害状況視察

○南相馬市生活復興ボランティアセンターの視察と活動

2011年8月2日（火）

### ●福島県相馬市

○相馬救援隊の相馬行胤氏から救援物資の対応と意見交換会

○立谷秀清相馬市長から震災発生時からの対応の説明と意見交換会

○相馬市から南相馬市での海岸沿いの被害状況視察

3月に一度、救援活動のため相馬市に入り、被害状況を確認していたが、今回は相当復興に向けて進んでいると感じた。3月は海岸には一切近づくことは出来なかったが、海のすぐ側まで被害状況を確認することができた。

相馬市、南相馬市の海岸沿いはリアス式海岸ではなく、浜田市とよく似た地形で、違いは浜田市より平地が多いことだ。浜田市に今回の津波が襲ってきたら、浜田市内は壊滅的な被害を受けると身にしみて感じた。浜田市で今まで策定されていなかった防災対策（津波ハザードマップ等）については早急に策定する必要があると感じた。

○南相馬市生活復興ボランティアセンターの視察と活動

南相馬市では8月から「災害」復興ボランティアセンターから、「生活」復興ボランティアセンターに変わっていた。被害を受けた場所から被害を受けた人への復興ボランティアに変わったのだと理解した。

センターでは職員が不足しており、東京から社会協議会の方が援助に来られていた。職員の方の指示や段取りがわかりやすく、初めての方でもすんなりボランティア活動に参加できると感じた。

最初にボランティア未経験者と経験者が分かれて並び、未経験者はボランティア保険に加入する手続きを行い、経験者はすぐにボランティア活動に向かう手続きを行っていた。

我々が活動したのは、被災された建具屋さんが新しく仕事を始めるための工場の片づけを手伝った。震災前の建具屋さんの場所も案内して頂いたが跡かたも無くなっていた。その近くには多くの方がお亡くなりになった福祉施設が、被害を受けた状況が未だにわかる状態で建っていた。自らボランティア活動を行い、建具屋さんの話を聞いて、これからは被災された人のためのボランティアセンターになっていくのだと感じた。

万が一、浜田市で災害があった場合でも被災された方のニーズに応えるボランティアセンターであるようにしなければならないと感じた。

### ○相馬救援隊の相馬行胤氏から救援物資の対応と意見交換会

3月に一緒に活動した相馬行胤氏に震災が起きてからの混乱状態の被災地でどのように救援物資を集めて、被災された方に分配したのか伺った。

相馬行胤氏は今なお存続する相馬藩主のご子息であり、相馬の地においては、誰もが知っている存在ということで周りのサポートが絶大だったことも救援物資に関する活動がスムーズに進んだ要因の一つだと感じた。混乱時には実行力がある方がしっかりとリーダーシップをとり、活動することが不可欠ではないだろうか。

全国から集まった救援物資をまずは全て、相馬市にある大きな道の駅に集める。そこで食料、衣類、薬などに分別して、各避難所が必要としているものはそこから運搬する。保管するものは分類別に保管場所を決めて保管し、そこから避難所に運搬するという活動をされていた。私も3月にお手伝いさせて頂いたが全く混乱することがなかった。

万が一の場合はこの経験を活かせるように、浜田市でできることをやっていく必要があると感じる。

### ○立谷秀清相馬市長から震災発生時からの対応の説明と意見交換会

立谷相馬市長に震災発生からの市長として対応してきたことを伺った。3月にお話を伺った時は原発問題で福島県が大変な時期だった。立谷市長は相馬に「籠城」ということで市民を守ろうとされていた。

興味深かったのが震災発生して48時間以内に考えたことが今の復興策にも生きて、続いているということだった。相馬市は仮設住宅の完成も早かったし、避難所を閉鎖するのも早かった。それも市長のリーダーシップがあつてのことだと感じた。

一番心に残った言葉は地方自治とは「戸籍の番人」ということだ。災害時には誰がどこにいるのか理解していないと救助や支援が後手になる可能性があるということだと感じた。

最後に、浜田市に大きな災害が起きないことが望ましいが、起きることを想定して生活しなければならない。福島県で学んできたことを今後の活動に必ず活かしたい。 以上